

地下空間に係わる一般社会向け発信メディアに関する一考察

A consideration about the information sending medium for the general society concerned with the underground space

西 淳二*・田中 正**・粕谷 太郎***・関口 佳司****

Junji NISHI, Tadashi TANAKA, Taro KASUYA, Keiji SEKIGUCHI

This paper describes about underground inquiry of investigation that an information sending medium deal with, that is a newspaper account, a novel & document & photograph collection, a picture book & fable, a television broadcast. It was surprised that the number of the published and televised matters more than a writer imagined it on the whole. There are two kinds of programs in the television broadcast. One is transmitting a familiar thing, and the other is transmitting a part of the dream and excellence of the tunnelling technology. There is underground space use at the familiar life. Then, it has been able to have always any longer for the life.

key word: the information sending medium, underground space use, newspaper account, photograph collection, fable, television

1. はじめに

近年の地下空間利用に関する研究は、2000年5月に「大深度地下の公共的使用に関する特別措置法案」が成立し、2001年4月から施行に入ったことを受け、新しい段階に入ったと考えられる。すなわち、大深度地下空間の構築方法やその空間利用方法などの更なる研究が必要であると考ええる。しかし、地下空間の構築方法などのいわゆるハード研究に対して、ソフト研究である空間利用方法や地下空間研究者以外の人々が地下空間利用に関してどのように捉えているかという課題に対する研究は非常に少ない^{1)~3)}。

そこで、本論においては地下空間に係わる一般社会向けメディアの中から、1)新聞、2)小説・ドキュメンタリー・写真集、3)絵本・童話、4)テレビ番組を対象として、情報発信に関して分析することを目的とした。

2. 最近の新聞情報から

最近切り抜いた記事を以下に羅列してみる。

2001.3.03 日本経済(夕刊) あすへの話題、ルーヴルの地下：パリの心臓部に位置するこの地下空間には、別(美術探検以外)の楽しい空間も広がっている。本屋に寄り、CD・レコード店や雑貨店をぶらつき、カフェ

キーワード：情報メディア、地下利用、新聞記事、写真集、童話、テレビ

* フェロー 工博 名古屋大学大学院 教授 工学研究科地圏環境工学専攻

** 正会員 工博 名古屋大学大学院 助手 工学研究科地圏環境工学専攻

*** フェロー 鉄建建設㈱ エンジニアリング本部 部長

**** 正会員 工博 関口佳司景観研究所代表

ェやレストランで一休みもできる。・・・

2001.3.31 日本経済(夕刊) 鐘: 国土交通省と東京都は日本橋の景観を一新するため、高速道路の地下化を検討するという。日本の都市が懐かしい風景を取り戻す起点になるだろうか。

2001.6.07 日本経済(夕刊) 新時代へ都議選 2001④: 地域の環境 VS 都の環境、幹線道路整備に揺れる、地下化求め対立(環状8号線の整備が予定されている相生町交差点付近の整備にあたって、住民側は、排ガス汚染を少しでも減らすために環八を地下にもぐらせる方法を求め、都と対立。都側は、工事費や工期、地盤の問題などから環八を地下にもぐらせる方法は難しい、と回答。)

2001.6.09 読売: 核廃棄物処分フィンランドの決断、地下埋設を承認、参考になる手法(フィンランド議会は先月、原子力発電所の放射性廃棄物を埋設する地下処分場建設を各国に先駆けて承認した。「最終処分の必要性や安全性などについて、国民への説明を各地で粘り強く丁寧に行ったことも大きな要因」との見方もある。)

2001.6.09 朝日: 名駅地下街、震度7で一部崩落、市が調査結果報告、平日夕方750人死亡推定(名駅地下街の滞留人口などを調べるとともに、東京消防庁の統計資料などに照らし、想定される被害をまとめた。)

2001.6.09 中日: 「人形広場」が電腦空間に、栄ガスビルB1(ヨーロッパの街並みを連想させる新たなシンボルを設置した地下1階エントランスホール)

2001.7.25 朝日: 100m 道路、3m 陥没(若宮大通の路面が直径約2m、深さ3mほどが陥没。)

2001.7.27 日本経済(夕刊): 東京都、割安な夜間に大量蓄電 NAS 電池採用、初の実用化、下水処理場に導入(ビルの屋上や地下など狭いスペースでも設置が可能で夜間の割安な電気を貯蔵して昼間に使うことで電気料金を大幅に削減できる。)

2001.8.02 朝日: 「デパ地下」に総菜旋風、柿安など「2強」けん引(デパ地下と呼ばれる大手百貨店の食料品売り場の売上高が上向いてきた。)

2001.8.03 朝日: 「自己責任」に理解広がる、使用済み核燃料世界初の地下処分、フィンランド原発依存の町が同意、耐震・容器課題なお(原子力発電所の使用済み核燃料を永久に地下に埋めてしまう計画が、世界に先駆け、フィンランドで動き出した。5月に国会承認を受け、2020年からの稼働を目指す。)

2001.8.11 日本経済(夕刊) いちばん図鑑: 氷のトンネル(北海道・西興部村)、溪谷底、天然冷蔵庫(トンネルの内部は気温4度前後でまるで冷蔵庫のよう、高さは約3m、幅は4~5m、数百mで行き止まりになるので正確には氷の洞窟)

2001.8.24 朝日: 超深地層研に端浪市が用地提供案、説明不足募る不信、「核ゴミ処分場」疑う住民(市長は「原発の恩恵を受けている以上、研究を進めて頂くのは我々の使命だ」と話す。)

2001.8.27 朝日、くらし、いい家に住みたい: 建築基準法改正が生んだ空間、地下室効果と波紋、限られた敷地住居広々、斜面に大建築住民反発(7年前の法改正で、規制の厳しい住居専用地域では、地下室が延べ床面積を広げる福音になっている。ところが、斜面に大規模な「地下室マンション」を造ることも可能になった。住宅地の景観を大きく変えるため、周辺住民の反発を招く例も少なくない。)

2001.8.28 日本経済(夕刊) 宇宙に迫る 1: 地下の望遠鏡、太陽を追う(アクシオンを観測するこの望遠鏡は、夜間筒先を床に向け、地平線下の太陽を追う。)

2001.8.29 日本経済(夕刊) 宇宙に迫る 2: 重力波の到来、逃さない(国立天文台三鷹キャンパスの地下に、どこにもつながっていない奇妙な形のトンネルがある。全体はL字形で一辺300m。)

2001.9.09 朝日、水の21世紀、沈んだ街の教訓 3: 地下街、「想定困難」対策遅れ(市は今年3月、「庄内川が決壊すると3時間後には水が押し寄せ、名古屋駅の地下街は最大3mまで浸水する」と予測した。)

犬が人を噛んでも記事にならない、といわれる新聞に「地下街」、「デパート地下」、「地下美術館」、「住宅地下室」、「地下の研究施設」、「核廃棄物深地層処分」、観光からの「氷トンネル」、環境保全(大気汚染)のための「道路地下化」、そして景観問題とのからみからの「マンション地下室」と「都市高速道路の地下化」

と、相当広範囲に地下利用問題が利点・欠点の両面から紹介されている。ただし、普通なかなか複数の新聞を購読するわけではないので、その辺を割り引いて考えておくことも必要か。

3. 小説、ドキュメンタリー、写真集の世界から

岩波文庫創刊 70 年記念の一環として、ジュール・ヴェルヌ「地底旅行」(1997, 岩波) が出版された。Voyage Au Centre De La Terre は『驚異の旅』シリーズの一冊として、海底(「海底二万里」)、空中(「征服者ロビュール」)、宇宙(「月をまわって」)などとともに 1864 年に、アイスランドの火山の噴火口から地球の中心に達することができると書かれていた謎の文書に従っての地球内部への旅行記であり、海と風と光にみたまされた地下の大空洞という設定に、地下のユートピア的世界が描かれている(偕成社文庫に小学上級以上向 1993 もある)。

ロザリンド・ウィリアムズ「地下世界」平凡社 1992 (Notes On The Underground, 1990) は、「空想上の地下世界に関する文学の中では、深さと時間との連想はもっと先までおし進められ、深さはますます深く、時間はますます遠くのびていった。ジュール・ヴェルヌの「地球中心への旅」では、探検家たちは地球の奥深くに、巨大な前史時代の人間らしい姿を見つける。……この視点から書かれたフィクションにあっては、地下または水面下の領域にあえてふみこむ人たちは、タイムトラベラーであるとともに精神的な巡礼者でもある。彼らは地表の物質的な現実を離れて地下へとびこみ、そこにかくされている真理をさぐり出そうとする。……」という序説からはじまって、「環境の質」には「精神的・社会的幸福を提供するという数量化できない能力」をふくむものであり、19 世紀以来、地下世界(完全な人工世界)をめぐる物語が、私たちの環境の未来について、予言的な見方を提供してきた、というテーゼを掲げている。

河合純枝「地下のベルリン」文芸春秋 1998 は、「未来を考えるには、まず現在を知らなければならない。しかし、明確でない現在像をつかむためには、過去を理解する必要がある。……時代時代の要請にしたがって構築された地下構造は、その構築者たちが、歴史の舞台から消え去り、地上の構築物がなくなったあとも、依然として存在しつづけている。中断、断絶の繰り返しのベルリンで、もしも継続というものがあるとしたら、それは、ただ一つ、「地下」をおいて他にないだろう。……わたしは、地下の「見えないもの」の目線、負の目線から「まち」を見てみたい。」という視点から、「U ボートとよばれる地下の特殊収容所」、「オペラ広場の地下の図書館」、「大地下壕」、「S パーンボックム広場駅・幽霊駅」、「シュルトハイス地下ビール工場」、「レストラン・プレヒトの地下室」、「ソフィーン街 18 番地、サウンドフェスティバルの会場」などの地下施設を紹介している。あとがき「ベルリンの地下全体を、総括して把握している機関がないことも学んだ」に、著者が主婦から出発して地下の専門家になっていく過程が表現されている。

ベンソン・ボブリック「世界地下鉄物語」晶文社 1994 (Labyrinths Of Iron-Subways In History, Myth, Art, Technology, & Way 1981) には、1816 年チャットハム造船所で、オーク材の破片をせっせと堀り進む双殻の軟体動物、船食い虫の観察から「この動物の行動を、ある種の機械的手段によって模倣すること」が、ブリュネルの特別研究課題となり、シールド工法を生み、とうとうチームズトンネルの完成にこぎつけた物語、ニューヨーク・ブロードウェイの幻の地下鉄の話から、ロンドン、パリ、ニューヨーク、モスクワ、ストックホルムなどの地下鉄網導入までの経緯、そして東京の銀座駅について「東京の長さ半マイルの銀座総合駅は、48 の黒大理石の入口を持ち、皇居のお堀から歌舞伎座までの、おそらく世界最大のショッピング地区の、地下 3 階まで広がっている。6 つの路線がその屋根の下に乗り入れ……」、と記述し、また通勤地獄を写真付きで紹介している。

中川浩一「地下鉄の文化史」筑摩書房 1984 の、東京地下鉄道の三越前駅誕生の経緯、そして巻末の地下鉄略年表が便利である。

小宮豊隆編「寺田寅彦随筆集第 5 巻」岩波文庫 1948 の「地図をながめて」には、「もしも丸の内の建物も

だんだんに地底の第三紀層の堅固な基礎の上に樹立される日が来れば、自然に建物と建物の各層相互の交通のために地下道路が縦横に貫通するようになるかもしれない。そうなれば丸の内の地図はもはや一枚では足りなくなって地下各層の交通を示す立体図が必要になる勘定である。・・・東京市全部の地図が美しい大公園になってそこに運動場や休息所がほどよく配置され、地下百尺二百尺の各層には整然たる街路が発達し、人工日光の照明によって成育された街路樹で飾られている光景を想像することもそれほど困難ではないように思われるのである（昭和9年10月、東京朝日新聞）」という一節の記述がある。このような光景の想像がさほど困難でない、といいきれた寺田寅彦はやはり大変な人物であったことは確かであるにせよ、21世紀に生を受けている我々は、どうなのか、改めて反省しなくてはいけないのではなかろうか。

村上春樹「アンダーグラウンド」講談社1997という総数62人のインタビュー記録がある。1995.3.20の朝、東京の地下でなにが起こったのか？そのときに地下鉄の列車の中に居合わせた人々は、そこで何を見て、どのような行動をとり、何を感じ、考えたのか？を追及するために本にした、と著者は書いている。また「阪神大震災（1995.1）と地下鉄サリン事件という、まさに世界を震撼させる深刻なふたつの巨大なカストロフが日本を襲った。・・・それら（震災とサリン事件）は、考えようによっては、ひとつの強大な暴力の裏と表であるということもできるかもしれない。それらはともに私たちの内部から一文字どうり足下（アンダーグラウンド）から「悪夢」というかたちをとってどつと吹き出し、同時にまた、私たちの社会システムが内奥に包含していた矛盾と弱点とおそろしいほど明確に浮き彫りにした。・・・はるかに大事なことは『私たちの社会システムが用意していた危機管理の体制そのものが、かなり杜撰で不十分なものであった』という大きな現実を身にしみて認識すること）の何行かに我々も賛同かつ反省するところ大である。

畠山直哉「Underground」（株）メディアファクトリー2000（写真集）は、東京のコンクリート暗渠とその微に光をあてた、まことに変わった写真集といえる。副題に Cimmerian Darkness and Stygian Gloom とある。

内山英明「Japan Underground」（株）アスペクト2000（写真集）は、近未来の地下空間から廃墟まで、原子燃料サイクル施設、首都圏外郭放水路、青函トンネル吉岡海底駅、都営地下鉄大江戸線、立川ウド地下栽培、など61箇所をコメント付き芸術写真で紹介したもの。FRIDAY 2000.9.22号グラビア「知られざるもう一つの都市がここにある、大冒険！ニッポンの巨大地下世界」として、相模原大深度地下開発施設、ウド地下栽培、生ハム熟成地下工場、人工氷冷蔵庫の4枚が紹介された。色フィルターのせい、非日常の別世界とも思える画像である。

武澤秀一「インド地底紀行」丸善1995は、その地底部の深井戸に至る階段部と柱を飾る8世紀から12世紀の建造物探訪記である。著者はあとがきのなかで、「従来のジオフロント（大深度地下利用）構想は、どうもハードな土木的技術に偏してきらいがある。これからの地球環境における建築と都市のあり方を環境倫理として追究していかなければ・・・。歴史は進歩という直線的な矢ではなく、循環と再生というスパイラルでとらえられるべきもの・・・」と記しているが、我々の目指すべき大深度地下利用のヒントとなるべきものを含んでいるといえようか。

4. 絵本、童話の世界から

加古里子「地下鉄のできるまで」福音館書店1994は、かいさくこうほう（開削工法）から、シールドこうほう、ケーソン工法、アンダーピニング工法、凍結工法、沈理工法までほんとうに幼児からおもうほど、いろいろなことの説明がある。

松岡達英、大野正男「地面の下のいきもの」福音館書店1988は、地面のしたのアリの巣、ミミズやカブトムシの幼虫、ハタネズミ、アズマモグラ、イタチ、巣のなかのカワセミのひな、クロスズメバチなどなど大人が読んでも楽しめる構成となっている。

デビット・マコーレイ（田村明訳）「アンダーグラウンドー都市の地下はどうつくられているかー」岩波書店 1981 は、都市の地下とくに建物の地下や街路の地下がどうなっているかについて、ベタ基礎、摩擦杭方式、支持杭方式、ピア基礎などの違い、その杭基礎を空中に浮かべたように下の方からみあげた図で示す、などわかりやすく工夫のある描き方で説明がある。電気ケーブルのマンホール、ガス供給検問点、地下鉄駅の全体構造などなども、訳者のあとがきという解説とあいまって、都市の地下とりわけ街路地下がやけに混雑している状況が一目瞭然である。

かつおきんや「辰巳用水をさぐる」能登印刷出版部 1994 は、300 年以上もまえに金沢城に水をひくためにつくられた辰巳用水の完成までの苦勞を描いたものである。

Brian Wildsmith “The Tunnel” Oxford Univ.Press1994 は、ロンドンに住むマーカスという小動物（ネズミ？）が、フランスの従兄弟からの招待を受けて、英仏海峡にトンネルを堀ながら訪問を果たすという大冒険物語である。多分ユーロトンネルの完成を題材としたものと思われる。表から読めば英語、裏から読めばフランス語（文字部分は上下 2 段で印刷）というなかなか面白い構成で、多分同じ場面の絵をみても、筋書きは少し違っている形のようなのである。

Valerie Guidoux & Jean-Michel Payet “Qu'y a-t-il Sous Paris?” Parigramme 1998（パリの下に何が？）は、パリの地質（地層）、採石場、地下墓地、水循環、下水道、地下鉄網、道路地下、快適な地下空間デザイン（新国立図書館）などパリの地下何でも小辞典ともいえそうな、ぜひ東京にも一冊あってもよいのではないか、とおもえる本である。

5. テレビ番組の世界から

1999.6.29 福岡水害、1999.7.21 東京新宿水害、2000.9.11～12 名古屋水害とりわけ前 2 件の場合には地下室における人命死亡事故をともなったことから、改めて都市の地下空間における浸水に注目があつまることとなった（2000.10 土木学会研究討論会：地下防災を考える－特に都市における水害対策－、（於）東北大学）。このこともあり、地下水災害に関するテレビ報道は少なくない^{4)~7)}。従って本報告では水災害以外のものについて紹介する。

1993.02.12 NHK「北アフリカ紀行」はチェニジアの月面クレーター（300 ヶ／マトマタ村）のような地下居住ノ話し。夏涼しく冬暖かい、家族が増すごとに横穴を掘って部屋を増やす、7 世紀ベルベル人がアラビア人から逃れて穴居住居をスタイル化したのが始まり。

1993.02.12 NHK ミッドナイトジャーナル「東京地下探検、深度 30m を行く、ライフラインは超過密」は、建築家平井氏の東京地下の地層図による東京礫層の説明からはじまり、地下鉄 7 号線後楽園駅の工事現場のガス管、下水管、電話線、東京電力 14 万ボルト送電線、水道管などが宙づりとなっている様子、直径 10m のシールドマシン、やっかいな地下水の汲み上げ、つまり浅深度地下は混雑、満杯の状況であることが示されている。東京都担当課長さんからのリザーブ空間の概念、丸の内地区 CG 三次元地下地図（国土地理院）、あるいはヘルシンキではすでに地下地図ができて活用されている話などが紹介された。

1994.04.14 NHK クローズアップ現代「地下に地価あり」は、平均 200% という首都圏鉄道の通勤ラッシュ解消をめざして、鋭意地下鉄建設を進めているのであるが、地下鉄がとうとうと地価が下がる、とか、補償の値段的な決め方に疑問があるなど、地面の下にも土地問題があり、地下鉄工事はなかなか捗らない。普通は地上の価格の 25～35% を補償しての区分地上権方式を、また一般的には明治 29 年の民法 207 条「その土地の上下に及ぶ」ということから、できるだけルートは道路下を選ぶ。しかし練馬区でマンションの一部 5m² のために 33 人の共有所有者でしかもほとんどが非居住者の事例では、その交渉に 2 年半もかかった。練馬区の区画整理方式による地下鉄敷設も住民は反対、地下鉄そのものに反対ではないが、せっかく獲得した自分の土地が減少することに反対している。地下鉄がくると固定資産税も上がる。

1994.04.17 NHK 経済マガジン「どう進めるか地下開発」は、ラッシュ時6万人/時を運ぶ急行線のルートとして、運輸省構想の大深度を採用し、地下50m以下をねらう西武鉄道インサイドレポート。土地の所有権は地下何mまで及ぶか、の答えは地球の中心までとしても、当面は上神井から新宿までの12km区間(いずれは都心部へも連絡)については、民有地地下も視野にいて検討していきたいということである。映画「ウォール街」の封切り、株価27,000円台という背景のなかで、用地費がただとなるとすれば、京葉線工事費100億円/kmという高工事費プラス交渉の時間を考えて十分補えるものと算段した。「JR総研の報告書：都心における大深度地下鉄」はノウハウを売ることも考えているので公表はできないが、地下開発の計画・構想はひとつのビジネスチャンス(佐藤工業、日立造船、清水建設)となる。

1999.04.10 NHKBS フォーラム「未来型都市への模索ー地下を生かした都市づくりー」は、フランスのデ・ファンスやカナダのモントリオールでの都市再生事例などを紹介するとともに、日本の新しい法律ー大深度地下利用法ーの内容、意義、活用方法について議論し、また安全への対処な大丈夫かについても若干触れている。

2000.03.07 NHK クローズアップ現代「地下水流とのたたかい」は、新小平駅での事故東京駅地下ホームの浮上のおそれ、埼玉副都心における地下高速道路工事による地盤沈下(住宅被害)などの問題点を紹介した。地下水検討委員会(佐藤邦明教授)は工法・影響を検討し、汲み上げた水を再び地盤に注入するという工法を採用したが、地下水低下1mによる住宅被害103棟が発生した。地下水の流れはなかなか複雑で、環状8号線いおぎトンネルでは、明治時代の地図を参考に旧河川のところまで通水管を再延長してよい結果を得たなどの事例もある。

2000.04.11 NHK プロジェクトX「友の死を乗り越えてー青函トンネルー」は、青函トンネルの調査から24年にも及ぶ、出水事故など幾度もの困難を乗り越えての世紀のトンネル掘りの、友情と人間の物語である。

2000.01.30 テレビ朝日「たけしの万物創世紀ーJapan Undergroundー」では、最初にはす池の下の地下寺院、大深度地下飛行機時速600km/hr超高速400人乗りー地中飛行機ーの話からはじまる。ドーバーのユーロトンネルでは日本のシールド機械が大活躍、あわせて19世紀ロンドンテムズ河底を掘るためのシールド工法がフナクイムシをヒントに、マーク・ブルネルにより1818年特許取得。ユーロの条件は月進530m、延長16km、水圧10kg/m²という大変厳しいものであったが、近藤スクリュウという新しい考え方を工夫して完成した。

2000.05.18 NHK名古屋「こんばんは6時です」ローカルニュースの「環境2000」では、名古屋高速道路東山トンネルの換気所を紹介した。完成模型をつかって説明、緑を守るために要塞のような、周辺の緑に排気の影響がないように高さ45mとし、壁面には自然のツタ、地下トンネルは高架より3倍のコスト、管理費も3倍。環境のためには、コストを社会が受け入れる時代、ということから必要な経費と道路公社は考えている。

2001.07.02~07.05NHK「昼どき日本列島」では、(月)東京駅大丸地下2階のお総菜工場、(火)地下鉄大江戸線木場公園地下の車庫(39編成入庫可能)、(水)神田川の環状7号線地下河川、(木)相模原東急建設地下実験施設(土木学会地下空間研究委員会環境・心理小委員会の神作委員長が出演)での植物育成実験、おりずる作成実験(地上地下の作業効率比較)、エレベーター内でのいまいる場所が地下何mと思うか(女性レポーターへの質問)などの生放送があった。事前相談段階では、高輪の寺院地下の変電施設、国会図書館、立川のうど栽培、大谷石採石場跡空間、八重洲地下駐車場、江戸からつづく糞蔵その他があったが、生で20分ということ、NHKらしさ、などから上記のものが選択されたようである。

2001.09.25 NHK プロジェクトX「巨大もぐらドーバーを掘れ、海峡に挑んだ地下の職人達」は、川崎重工の新式シールド機械の開発と現場での血のにじむような管理・改良の歴史の実話である。チョーク屑という白亜紀の悪魔の地層とトンネル機械屋との格闘の記録である。

6. まとめ

統計をつくるほどの件数はないので、以下に感想的にまとめてみたい。

・全体について：

想像していた以上の件数が出版もしくは放映されていたことに驚いたこと。しかし我々は集めたものを見ているわけで、一人の個人は、この中のたまたま一つか二つか精々三つぐらいを横目で見ているにすぎないということにも留意すべきであろう。

・新聞記事について：

「全体について」と同様のことがいえる。やはり一般市民は精々全国紙一紙と地方紙一紙かスポーツ紙という風に考えると、自分の購読紙の範囲が情報源となるのでこのうちの限られた数を眼にすることになるう。

・小説、ドキュメント、写真集等について：

「地下の世界は私（村上春樹）にとって、一貫して重要な小説のモチーフであり舞台であった。たとえば井戸や地下道、洞穴、地底の川、暗渠、地下鉄といったものは、いつも（小説家としての、あるいは個人としての）私の心を強くひきつけた。・・・」と「アンダーグラウンド」のあとがきに記述する村上春樹の言葉は、他の多くの作家、写真家にも、あるいは共通することなのかもしれない。東京の川の暗渠に光をあてて写真にとった畠山直哉の Underground は何を発信したいと考えたのであろうか。

・絵本、童話について：

「地下鉄のできるまで」と比較するとき「パリの下に何がある？」は、大都市の地下空間利用に、ぴったりと照準があたっているように感じる。パリという大都會がある日一辺にできたわけではなく、その歴史を語りながら、なかなか上手に、都市の地下利用の現況と必要性をさりげなく伝えている。最後の場面が、地下運河の観光ツアーであるところなど、したたかなパリの生きざまにも繋がっている。このような絵本が訳本でも出版されないものであろうか。

・テレビ放送について：

「昼どき日本列島」と「たけしの万物創造」につきる。この二つは相当広い範囲で、地下空間利用というものの一つの側面が、広報されたのではなからうか。前者はわりと身近かな身のまわりのものが紹介され、後者では、夢の部分と日本のトンネル技術の優秀さみたいところが良くわかったように思う。

最後に学生からのレポートの一部を以下に紹介する。

「わかりやすく地下鉄のできるまでを説明した絵本から信じられないような地下空間の利用を載せた本まで、一般人が手に入れられる様々な本が出版されている。その内容は、どこか憑かれるものが多かった。それは、地下というものが私にとって、異次元的な空間、もしくは異なる世界のように感じられるもので、それを利用するということが驚きで想像を絶することだからかもしれない。しかし、地下というものを、ふだんの生活において実際に何らかの形で利用している。それなのに、あらためて本という形で紹介されると、驚き、感心してしまう。地下というものの価値を考えず、当たり前存在として認識してしまっているからだろうか。それとも、地下の利用のされ方について自分があまりにも無知だからだろうか。今回の講義での様々な本の紹介により、地下空間は我々の生活の身近にあるということ、また、すでに我々の生活に欠かせないものであるということを実感した。・・・そして生活を豊かにするとともに、我々を驚かし、感心させるような地下利用を期待している。」

参考文献

- 1) 東 努・棚橋 由彦・後藤 多美子・江崎 哲郎：新聞検索に基づく地下施設の防災に関する調査研究，年次学術講演会 第51回，土木学会第51回年次学術講演会講演概要集 共通セッション，pp.134～135，1996. 09

- 2) 後藤 恵之輔：民話・夜話・童謡における”地下”みてあるき，地下空間シンポジウム 論文・報告集 第2巻，土木学会 地下空間研究委員会，pp. 189 ～194，1997. 01
- 3) 関口 佳司・北村 真一：現代映画における地下空間イメージの分析，都市計画論文集 32号，日本都市計画学会，pp. 307～312，1997. 12
- 4) NHK クローズアップ現代：「列島を短時間豪雨が襲った、地下室の恐怖、濁流の恐怖」，1999. 08. 26
- 5) NHK サイエンスアイ：「地下浸水は防げるか、新たな都市災害に迫る」，2000.
- 6) NHK 大阪：「大雨に備えるー地下街の浸水を防げー」、「関西の水害対策ー地下街を浸水から守るー」、「特集 集中豪雨ー都市に潜む地下の危険ー」，2001. 06.
- 7) HBC テレポート 2000：「もし札幌が洪水に襲われたらー地下鉄東豊線大通駅」北大藤田睦博教授，2001. 09. 11